

第 21 回 U20 アジア陸上競技選手権大会帯同報告

鎌田 浩史¹⁾²⁾

1) 公益財団法人日本陸上競技連盟 医事委員会 2) 筑波大学 医学医療系 整形外科

【はじめに】

2024 年 4 月 24 日(水)から 27 日(土)まで、UAE(アラブ首長国連邦)・ドバイにおいて第 21 回 U20 アジア陸上競技選手権大会が開催された。本大会の参加資格は 2024 年 12 月 31 日時点で 16 歳、17 歳、18 歳、または 19 歳となる、2005 年 1 月 1 日から 2008 年 12 月 31 日までに生まれた競技者である。日本からは男子 15 名、女子 14 名、計 29 名が参加したが、直前にケガにより参加を辞退した者が 1 名いた。今回、チームドクターとして帯同し、選手のメディカルサポートを行ったので、その活動内容を報告する。

【ドバイへの渡航】

アラブ首長国連邦(UAE)はアラビア半島の突端に位置し、世界各地からのアクセスが良い交通の要衝である。その中心都市であるドバイは、砂漠の中にありながら、世界で最も高い建築物であるブルジュ・ハリファがそびえるなど、近代的発展が著しい都市である。実は、遠征の直前に観測史上類を見ない大豪雨が発生し、洪水や家屋の浸水、競技場の冠水など、大会の開催が危ぶまれる状況が発生していた。しかし、幸いにも数日で都市機能が回復し、大会は予定通り開催されることとなった。

我々はイスタンブール経由でドバイに入ったが、イスタンブールでは飛行機の到着遅延により乗り継ぎがギリギリとなり、慌ただしい移動を強いられた。そしてドバイ到着後、大きな問題、全員の荷物が到着していないという事態が発生した。夜中の 3 時過ぎまで空港で交渉が続けたが、洪水の影響で空港の機能が十分に回復しておらず、航空機の変更や遅延が相次いでいたため、荷物の混乱が生じているとの説明を受けた。

結局、荷物が無いままホテルにチェックインすることになり、生活必需品や選手にとって重要なアイ

テムが全く手元にない状態で過ごさざるを得なかった。トレーナーのケアを行うためのベッドも届かず、荷物が届かない場合の対策を模索する必要に迫られた。近隣の雑貨店で生活必需品や練習に必要な道具を調達する様子は、何とも言えない光景であった。最終的には大会前に全員分の荷物が到着し、事なきを得たが、数日間はあるような練習ができないという波乱の幕開けであった。

ドバイは中東の都市であり、この時期でも日中の気温は 30 度を超える。一方、夜間は 10 度台まで下がるため、寒暖差による体調変化が懸念された。さらに、乾燥した気候と洪水後の乾いた泥による砂埃が蔓延しており、喉への影響も心配された。ジュニア選手たちは日本で十分な暑熱順化ができていない状況であったため、熱中症への警戒も必要であった。

【宿舎・環境・会場】

宿舎は一般的なホテルであり、設備は充実していた。トイレやシャワーなどの水回りも十分で、快適に過ごすことができた。選手が使用する水についてはホテル側で準備してもらい、アイススラリーも必要に応じて冷凍庫で管理してもらえよう手配を整えた。また、一室をトレーナールームとして使用できたため、ここで選手のケアを行った。

食事はビュッフェスタイル(図 1, 2)で、衛生面でも申し分なかった。ただし、毎回同じようなメニュー内容で多少の単調さを感じることもあったが、全体的には美味しくいただける食事であった。生野菜については注意するよう指示していたが、幸いにも体調を崩す選手はいなかった。

競技場や練習会場は若干離れており、バスが運行されていた。練習会場は遠かったものの、競技場までは徒歩で 15 分程度の距離であり、余裕がある場合には徒歩で向かうことも可能であった。ただし、練習会場へ向かうバスが誤って 30 分ほど先の別の



図 1：食堂



図 3：このくらいでしかアップできなかった



図 2：食事



図 4：大会会場での控え場所

競技場に到着するトラブルがあり、困惑した。大会期間中でなかったことは不幸中の幸いであった。

練習会場は日陰のない施設であったため、空調の効いた控室を活用しながら対応した。気温が高く、日差しも強烈であったため、選手には暑さ対策を徹底するよう指示し、簡易型アイスバスを必要に応じて使用するよう案内した。しかし、練習会場がスポーツクラブに属するグラウンドであったため、サッカーとの共用で運用されており、トラックにボールが転がり込むなど危険な場面もあった。さらに、大会期間中にはその練習場が使用不可となり、練習会場やアップ会場が確保できない事態に陥った。選手たちは大会会場周辺を活用するなど工夫を凝らしながら試合に臨むこととなった。(図 3、4)

競技場での氷の準備は不十分であった。何度か交渉を試みたが、この地域では氷を多用する文化がないため、ホテルでも提供量が限られており、近隣のスーパーでも十分な量を確保できない状況であった。それでも何とか工夫し、必要量を確保すること

ができた。

【大会中のサポート】

メディカルスタッフは、ドクター 1 名とトレーナー 2 名の計 3 名で対応した。3 人で役割を分担し、練習会場、競技場、宿舎を競技スケジュールに応じてカバーする体制を取った。基本的にドクターは競技場を中心に活動した。(図 5、6)

今回、熱発の選手が 2 名いた。1 人は試合前に 39 度を超える発熱があったため、相談のうえ隔離可能な部屋を用意し、周囲との接触を避けるよう対応した。臨床症状は重篤ではなかったため、安静にしつつ解熱剤を使用し、その後症状が改善した。結果的に周囲に配慮しながら試合に出場することができた。もう 1 人の選手は競技終了後に発熱したため、帰国まで安静に過ごす対応を取った。幸いにも周囲への感染拡大は見られず、帰国時には何とか解熱傾向を確認できた。



図 5：メディカルスタッフ

その他、肉ばなれを抱えて大会に臨んだ選手と、競技中に新たな肉ばなれを発症した選手がいたため、トレーナーと連携して対応にあたった。

【ドーピングコントロール】

本大会でもドーピング検査が実施され、我々選手団の中から合計7名の選手が対象となった。検査室はプライバシーが十分に保たれる良好な環境であり、ドーピングコントロールステーション内のプロセスにも問題はなかった。しかし、シャペロニング（選手の監視体制）に不備が見られた。通常、競技終了後の対象選手には直ちに通告し、確実な監視を行うことが求められるが、ある選手に関してはレース直後に通告が行われず、次のレースが迫る中で遅れて通告された。この件について、選手には全く落ち度がなかったため、後に監視体制の不備が選手側の責任にされることを防ぐべく、補足報告書に状況を記載して提出した。

事前のアンケートでは、ドーピング検査の経験がある選手は7名のみで、大半の選手が初めての検査となった。そのため、検査中に時折解説を加えながら対応した。これから国際大会で活躍することが期待されるジュニア選手たちであるため、ドーピングに関する教育の重要性を改めて感じた。

【まとめ】

第21回U20アジア陸上競技選手権大会に帯同した活動を報告した。今回参加したジュニア選手の多くは、初めての国際大会であった。入国時に経験したことのないような大きなトラブルが発生したものの、事務局やコーチの皆様の適切な対応により大き



図 6：宿舎内のトレーナールーム

な混乱を回避することができた。チームリーダーからは「このような危機を乗り越えるのも成果の一つである」との言葉もあり、選手たちは一つ成長したのではないかと感じられた。

メディカル面では、初めて接する選手が多く、大会前の身体の状態を十分に把握できなかった点で、コントロールの難しさを痛感した。また、代表選手の中には出場できなかった者もあり、早期対応が可能であれば状況を改善できたのではないかと考えられる。今後の課題として検討したい。

さらに、今回の大会を通じて、メディカルスタッフとして選手にセルフケアや身体の異変に対するアセスメント、適切な対応法を伝えることを心がけた。この経験を契機に、ジュニア選手たちがさらなる成長を遂げることを期待している。